

## 志村 恵「楽しいツインズライフ」⑧

### ドイツの『ツインズ・プラス』を訪ねて

ある時、以前から著書をパラパラと拝見し、どんな方なのか大変興味があったドイツの雑誌“Zweillinge “（『ふたご』）の編集長マリオン・フォン・グラートコヴスキーさんを訪ねる機会がありました。今回は、そのときのインタビューを再構成してお届けしたいと思います。

フォン・グラートコヴスキーさんは、現在、ロマンティック街道のアウグスブルクとフェッセンの途中にあるラウスベルクという中世の雰囲気を残した大変に綺麗な町の隣町カウフェリングに事務所を持ち、“Zweillinge “とふたご関連の本を出版する会社を経営しています。インタビューをした日は、ちょうど、パート社員が夏休みを取っていたということもあり、ひっきりなしにかかってくる電話対応の合間を縫ってのインタビューになりました。快活でパワーのある方で、いつもの「ふたご関係者はみんな元気だなー」との印象を持ちました。

志村： まず、この雑誌の創設の時期ときっかけについてお話をください。

フォン・グラートコヴスキーさん（以下、v. G.）： „Zweillinge “ は、1988年創設ですから、もう17年になります（当時）。きっかけは、ご想像通り、自分がふたごの母親になったことです。私は、1984年に二卵性の男のふたごを生みました。マクシミリアンとコンスタンティンです。当時ドイツでも、ふたごの妊娠・出産・育児に関しては、ほとんど情報がなく、私はふたごがおなかにいることが分かった時、いつかふたごの親のために本か何かを出版したいと思ったのです。

志村： でも、本や雑誌の出版はなかなか素人には大変ですよ。

v. G.： ええ。でも、私はそのときすでにフリーランスのジャーナリストとして働いていましたから、その点では、自分でもうってつけだったと思います。それに、実は私の家系は、出版業を父の代まで営んでおりましたので、そちらの知識もあったことが幸いしました。

志村： 最初はどんな感じで出版されたのですか？

v. G.： 雑誌作りに関しては、アメリカの『ツインズ』を参考にしました。やはり、何らかの雛形は必要でしたから。そして、祖父や父の経営失敗から学んでおりましたから、慎重に市場調査をしました。経済誌を使って調査をし、最初は、季刊で1000部の発行から始めました。ロスが出ますから、駅の売店や大きな書店に置くという形ではなく、年間購読者を募るやり方を取り、今でもその形式は守っています。でも、看護雑誌に宣伝を出してから、急速に購読者が伸び、三年目の1990年からは、隔月の発行にすることが出来ました。現在では年12回発行です。発行部数は、2002年がピークで4300部。現在は、少し下降気味で、3200人の定期購読者がいます。購読料は、年間46,80ユーロ（約6400円）です。バラですと、一冊3,90ユーロ（約530円）で、他に1ユーロ（約135円）の郵送費がかかります。

志村： 記事の内容はどんなものですか？ 執筆陣は医者や専門家もいますか？

v. G.： いいえ。記事は全部ふたごの両親が書きます。

志村： ええっ！ それで、記事は集まりますか？

v. G.： それが集まるんです。記事が集まらなくて困ったことは余りありません。内容に関してですが、私たちの雑誌の記事の中心は情報です。たとえば、どのようにして簡単に料理をするとか、あるいはふたご特有の育児技術、子どもを連れての旅行のコツとかです。それも親同士が情報交換している感じで紙面づくりをします。もちろん、購読者の中にはお医者さんもいますが、その場合もふたごの一人の

親として記事を書いてもらいます。それから、特集のようなものもしません。あくまでも、情報交換という観点で作っています。また対象ですが、大体妊娠が分かってから3歳になるくらいまでの多胎児の家庭をターゲットにしています。そのあたりの時期が、やはり一番大変ですから、雑誌による情報やつながりが必要なのです。

志村： 最近では、メーリングリストやチャットなどをする人たちが多いようですが、フォン・グラートコヴスキーさんの雑誌でも、メーリングリストを立ち上げたり、電話相談をしたりしていますか？

v. G.： いいえ。私たちは雑誌に集中しています。でも、最近購読者が減少気味なのは、そうした新しいメディアの影響かもしれません。

志村： 日本でも多胎児の育児支援が大きな問題になっていますが、ドイツの多胎児の家族が抱える問題は何かでしょうか？

v. G.： そうですね。いくつか挙げられると思います。一つ目は、孤立です。

志村： 日本では多胎児関係の育児サークルは、約250位あると思われませんが、ドイツではいかがでしょうか？

v. G.： 詳しくは分かりませんが、私の把握している範囲では、たぶん80から100位ではないでしょうか。この近所にも一つありますよ。そうしたサークルの情報は、雑誌で紹介しています。サークルでは、「蚤の市」をやったり、定期的な飲み会をしたり、相互訪問をしたりしています。でも、基本的には余り重い課題を負わず、軽い活動をするグループが多いようです。多胎児家庭はただでさえ大変ですから、そこで負担が増えてしまっても仕方がありません。

志村： フォン・グラートコヴスキーさんは、お見かけしたところ、大変元気のある方ですが、何か秘訣のようなものはありますか？

v. G.： 私は体を動かすのが好きです。ということで、ジョギングもしますし、年に4回ほどスキーにも行きます。スキーは一人で二人は見られませんから、夫を無理にスキーに巻き込んで、ふたごのスキーの練習に随分つき合わせました。それから、休暇旅行によくエルバ島に行きます。共働きですから、そうした息抜きは絶対に必要です。そして、一番大事なものは、そういう時、あるいは日曜日などの休日でもそうですが、仕事のこと、ふたごのことを考えないことです。昔は、そうした時でも、ふたごを見るとすぐに近寄って話しかけたりしたのですが、今ではそうしたことはしません。息抜きの時には、その「事柄」から離れることが必要です。

志村： なるほど。それはとってもよいアドバイスですね。では最後に、今後の抱負のようなものをお聞かせください。

v. G.： はい。現在は先ほど言いましたが、小さいお子さんの家族を対象にした紙面づくりをしています。でも、自分の経験からも思春期など大きくなってからの問題もたくさんあります。将来的には、そうした問題まで手を広げて生きたいです。また、成人したふたごに対してのアンケート何かもしてみたいですね。それから、最近はじめたふたごの集会やさまざまな企画や実験に対するエージェントの活動もさらにやって行きたいと思っています。

志村： 分かりました。これからのご活躍とご健康をお祈りいたします。今日は本当にありがとうございました。

v. G.： こちらこそありがとうございました。日本の皆さんによろしく。

事務所で真っ先に目に入ってきたのが、横三連の三つ子用バギーでした！ 思わず大騒ぎをしてしまいました。並んでいるふたご・三つ子用のバギーの数々を見ているだけで、嬉しくなってきました、大げさ

ですが、「うーん、ふたごに生まれてよかった」と再確認した訪問でした。本当に、インタビューに行っ  
てよかった。フォン・グラートコヴスキーさん、またお会いしましょう！

『ツインズぷらす』第10号（多胎育児サポートネットワーク）から転載・修正